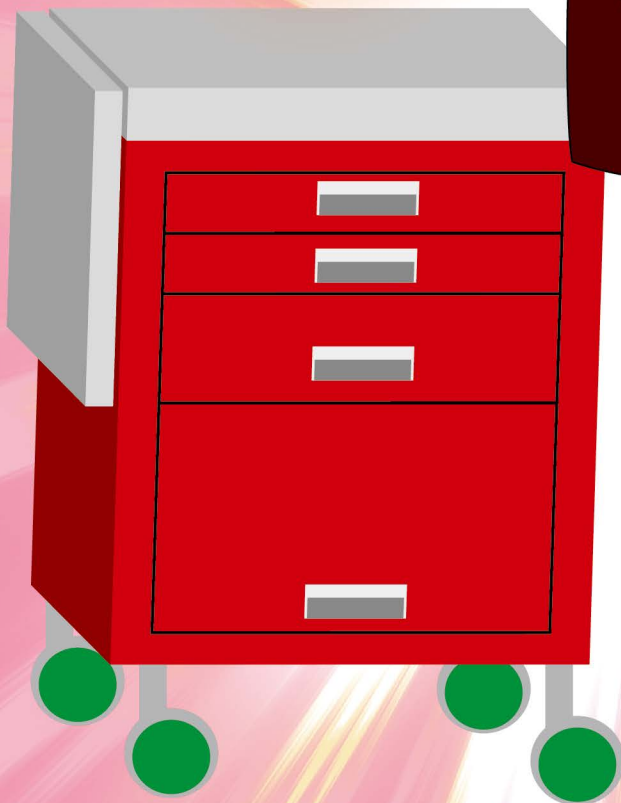
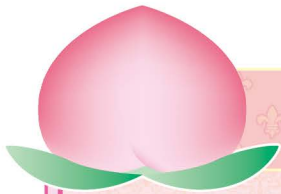


ミラクル



リカバリー



ミラクルリカバリー

人はミスをする生き物。しかし、逆境を奇跡的に乗り越えるのも人。患者の生命が危機に瀕している時、看護師は、奇跡的なりカバリーができるチャンスを与えられる。人の命を救えば、世の中ではヒーローと呼ばれる。普通の人には真似したくたってできない。危機に立ち向かい、何度も奇跡を起こして何度もヒーローになろう！

◆ 甲陽軍鑑に学ぶ安全⑦

(第4次) 川中島の戦い①

信玄公の踏ん張り

一五六一(永禄4)年、信玄公は

謙信公と信濃国川中島で対峙した。

謙信公は武田方の海津城を攻め落とそうと近くの妻女山に陣取っていた

が、不思議と海津城を攻めなかった。

2日後に到着した信玄公は上杉軍の退路をふさぐ形で陣を敷き、様子

うかがったものの、謙信公はやはり動

かず、信玄公はすんなり海津城に入った。この時、兵力は武田軍2万、上

杉軍1万3千。そして、信玄公は重

臣飯富虎昌、馬場信春(当時信房)

の進言を容れ、攻撃を仕掛けることに決定した。参謀山本勘助の立てた

作戦は、武田軍を二つに分け夜陰に

紛れて行動を開始し、本隊8千は上杉軍の退路にあたる八幡原に陣を敷

き、明け方、別働隊1万2千が妻

女山に攻め込んで上杉軍を八幡原に

追い出し、本隊とともに挟み撃ちに

する、というものであった。そして、

決戦の日を迎える。夜明けとともに

信玄公が八幡原に見たものは、まだいるはずのない上杉軍であった。謙信公は作戦を見破り、全軍で妻女山を出て、武田別働隊が空の陣地に突入している間に、手薄な本隊に突撃を仕掛けてきたのであった。数で勝り、かつ強力な上杉軍に攻撃され、多くの部隊は崩れかかり、副将格の信繁公や山本他多くの死者を出す厳しい局面となったが、信玄公自身は負傷しながらも本営の牀机(椅子)から一歩も引かずに踏みとどまって戦いを指揮した。粘り続けること数時間、別働隊が妻女山から到着し、上杉軍を後方から攻めたため上杉軍は崩れ、越後へ撤退していった。信玄公があきらめたりうろたえていたら、上杉軍に壊滅させられていたであろう。まさに必死の踏ん張りが奇跡的なりカバリーを生んだのであった。

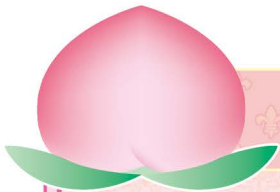
* 出典：品32

疾如風、徐如林、
掠如火、不动如山

日頃も 五感で



実践
KY



日頃も五感で実践 KY

危険予知 (KY) は、日々の積み重ねがものをいう。KYT の時だけの KY であれば、訓練のための訓練になっていざというとき何もできない。大事なのは日頃から五感を使って KY を心がけることと、気がついたらすぐ実行する習慣を身に染み込ませること。日々の実践で感覚を研ぎ澄ませて「スピリチュアルセンサー」を手に入れよう。

◆ 甲陽軍鑑に学ぶ安全 ⑧

(第4次) 川中島の戦い②

謙信公の危険予知

それにしても裏の裏をかいいた謙信公は見事である。決戦前日午後、謙信公は妻女山から武田軍の様子を見て、先陣部隊と本陣部隊とで炊事の煙の様子が違うのに気づき、作戦を完璧に見破った。おそらく炊事の時間の差や煙の量から、軍勢を二つに分けること、さらには、夕食だけでなく翌日の朝食まで準備していることを察知し、すべてを洞察したのである。また、謙信公は日が暮れてすぐ行動に移したが、武田軍にそれを悟らせなかった。普段から夕食時に翌日の食事を各3食分用意するという軍律があり夜の闇に炊事用の火を焚かずに済んだため、かつ、大した音もたてず手前の千曲川を全軍に渡らせたためである。これは日頃からの危険回避行動の実践がなければとてもできることではない。さらに、千曲川の川原に千の軍勢で甘粕景持を配置したが、甘粕は

小勢ながら別働

隊の攻撃を引き受けると

もに、別働隊に突破され上杉軍が

挟み撃ちとなり崩れた中でも、殿

(最後尾)の役に徹し、散り散りに

なった兵を静かに集めて越後に帰っ

て行った。上杉軍の損害を抑える殊

勲であり、この配置も的確であった。

振り返って思えば、川中島に先着し

た謙信公が海津城を攻めなかったの

も、この決戦を見通しての作戦だった

たかもしれない。

月毛の馬で単騎武田本営に突入

し、三尺の刀を振るって信玄公に襲

いかかるなど、戦鬪での勇猛さばかり

が目立つ謙信公であるが、冷静そ

して深遠な洞察力と日頃からの実

践があったからこそ、こうも霊的な

までの危険予知をして、あざやかな

手際で信玄公を絶体絶命の危機に

陥れたのであった。

* 出典：品12、32



装備

万端



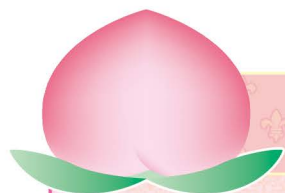
放射線
管理区域



指示あるまで入室
しないで下さい。
院長

いざ
出陣





装備万端 いざ出陣

防具をつけず戦場に向かうことにならないように。無防備で危険に向き合うなど愚の骨頂。どんな戦も装備を固めてから始まる。感染、針刺し、抗癌剤被曝、電離放射線被曝その他、いずれもやるべき対策は決まっている。まあいいや、なんて思って手を抜くな。後悔する事態とならないよう常に物理防御を徹底しよう。

◆ 甲陽軍鑑に学ぶ安全 ⑨

常に兜の緒を締めよ

戦争は命の奪い合いであり、装備の弱さは命の危険に直結する。先の瀬沢の戦いは信玄公の攻撃で勝利となったが、若い信玄公を侮る信濃勢は休息にかまけて油断もしていた。朝霧が晴れるまで武田軍の攻撃に全く気づかなかつた信濃勢は、武器や馬具を装備することもなければ兵の配置もしていなかったのである。

また、戦場にある限り、兜の緒は締め続けなければならない。板垣信方は幾多の戦功輝く武将であったが、上田原の戦いのさなか、油断で命を落とした。戦上手の板垣は村上勢を撃退し、勝ちに奢おぼって武器を置き、配備を解き、討ち取った村上軍の兵の首の実検をしていたところを体制を立て直した村上軍に攻め込まれたのであった。

攻撃時はなおさら装備を怠おろそかにはならない。長篠の戦い後の一五八〇（天正八）年、少し余力のある武田



軍は上野国東部に進出した。この時、敵方の膳城ぜんじょう付近で防備を解いていたところを攻撃された。それは簡単に撃退したが、その勢いに任せて甲冑をつけなのまま城攻めにかかった。勝頼公は止めようとするもすでに攻撃は始まっていた。膳城を陥落させ一番乗りの栄誉を手にした原昌栄まさひでであったが、頭に受けた刀傷がもとで若いながらも死亡した。

信玄公は、甲斐国の掟である甲州法度こうしゅうはつど之次第で、戦国の世であるからには諸事をなげうって武器を用意することが肝要である（20条）と定めている。信繁公も家訓で武器の準備を説く。装備はしっかり用意した上でしっかり装着しようやく意味をもつ。信濃勢や板垣、原のような無意味な不覚をとらないよう、万端を心がけねばならない。

* 出典：品27、32、56